●留学僧からの便り

オックスフォードの街から

平成元年六月二十八日

モスクワ空港での珍事件

大学も夏休みになり、学生は郷里へ、あるいはバカンスへとオックフォードを去り、いれ代わりに観光客の姿が目立つようになりました。例年になく暑い夏となったオックスフォードですが、それでも雨降りの日などは、かなり気温も下がり、秋物の上着はいつも欠かせません。日本のように「衣替え」というような風習はこちらにはあてはまらないようです。街を歩いても、半袖姿があれば、皮ジャンを着た若者やら、コートを着込んだ老人の姿も見うけられ、その個性の強さ―むしろ統一性のなさといったほうが適切でしょうか―に驚かされます。

四月四日ソビエトのアエロフロート（SU）で成田空港を飛びたって十九時間あまり、ようやくその日の夜十時、イギリスのヒースロー空港に到着いたしました。途中モスクワでは乗り継ぎのため、寒いなか、四時間も待たされました。空港の外に出る訳にもいかず、免税店をのぞきながら時間を費したわけですが、太陽の光が目を直撃するくらい異様に強烈であったことが、とても印象的でした。

ところで、モスクワからイギリスまで、アエロフロートは座席指定券を出してくれません。つまり全部自由席なのです。気ままな一人旅ならいざしらず、私のように妻と一歳半の子供を抱えた家族もちには大変ショッキングなことでした。席がうまく横並びにとれなかったら一大事です。もしかしたら最悪の場合、オーバーブッキングがあったりして、座れないかもしれません。これは大変なことになったとオロオロし始めた心配性の私は、何とか席を確保しようと一時間前から列の先頭に並んでいました。ところがいざ改札が始まるや、一応は出来上がっていた列はたちまちのうちに崩れてしまいました。

我先にと争って横割りして来た連中によって、改札口はパニック状態に陥り、私の小さな娘などはベビーカーの中で、ガリバーの国に行った小人の如く、いつ踏みつけられるかもしれない危険にさらされてしまったのです。押し合いへし合ししながらようやくのことで改札口を脱出、席もなんとか確保、ともかくモスクワを後にすることが出来ました。やはり旅行運賃をけちらずに、成田から約十二時間でロンドンに着く、ノンストップの直行便をもつ日本航空や英国航空にすればよかったと後悔

いたしましたが、今では良い思い出です。

どこにあるのかオックスフォード大学

世界屈指の学問の地オックスフォード、そして町を見降ろすようにそびえ立つ学問の殿堂オックスフォード大学、時計台を中心に整然と配列された古色蒼然とした煉瓦造りの建物、これが出発前に私が抱いていたイメージでした。到着時に降り出した雪もようやくやみ、時差ボケから立ち直った頃、このイメージの大学を捜すべく市内探索へと出かけました。ところが地図を見ても、市内を歩き回っても大学がないのです。どう探してもオックスフォード大学は見つかりません。私の抱いていたイメージの大学が存在しないのです。日本の大学のイメージがここでは通用しないことが分ったのは、かなり経ってからのことです。

イングランド中央部、ロンドンより列車で一時間、バスで一時間四十分くらいのところに位置するオックスフォード市は、人口十一万五千人、そのうち約一割強にあたる一万三千五百人が大学生です。市の主要な場所は殆んど大学所有であり、全くといっていいほど大学町であります。ある観光ブックに「大学のなかに町がある」とありましたが、けだし名言といえましょう。また仏教に「群盲、象を撫でる」という表現があります。これは目の不自由な人たちが象の足や耳などを撫でて、象とはこういうものだと様様な当て推量をすることに喩えて、枝末なことにとらわれると全体を把握できないことの欠点をいましめたものです。私の場合もこれと同じで、余りにイメージの大学に固執したため、本当の大学が発見できなかったのでした。町自体がそのまま大学のキャンパスなのです。キャンパスの中にバスも走れば、デパートもある、マクドナルドの店もあると思えば納得がいきます。ただし日本にあるような時計台を中心とした大学本部は存在しません。University of Oxfod とは、市内に散在する三五の College の統一体にすぎません。各カレッジは独自に試験をして学生を受け入れますが、彼らは皆卒業後、オックスフォード大学の学士号を取得します。各カレッジの学生数は平均して三百名ぐらい、一番多いカレッジでも四百名強、少ないカレッジでは二百名くらいしかいません。彼らは大体カレッジの寮に寄宿し、hall で食事をとります。ちなみに浩宮様が在学されたのは Merton カレッジ、礼宮様が在学しておられるのは St. John's カレッジです。

ところで興味深いことに各カレッジは独立採算制をとっています。つ

まり裕福なカレッジとそうでないカレッジとがあるわけです。この差がどういう形になって学生たちに反映するのかと申しますと、ホールでの食事の差もさることながら、各カレッジに所属するtutorの質と量にその差が現われてまいります。この大学の機構はなかなかむずかしく一口では説明するのは不可能ですが、あえて大胆に申し上げるなら、教育の基本は学生と教師との個人指導制(tutorial system)にあります。学生は必ずしも講義に出席する必要はありませんが、一週間もしくは二週間に一度教師と面談し、個別指導を受けることが義務づけられています。大学の教授は勿論この制度に従い指導(tution)を行いますが、法律・経済・英文学といった学生に人気のある分野では圧倒的に教授の数が足りません。そこで各カレッジは、優秀な学者をカレッジ専属のチューター(tutor)として雇い、彼らに高額な報酬を支払うのです。ですから裕福なカレッジほど優秀なチューターをたくさん雇うことが出来るわけで、学生にとって大きなプラスとなります。従ってそのようなカレッジは大学の中でも入学するのが特に困難となるわけです。先のセント・ジョーンズ、Balliol, New College等は「お金持ち」との風評でした。

彼らチューターはあくまでもカレッジに所属し、大学とは関係ありません。いっぽう教授は副業としてカレッジでの指導を行うことは禁じられています。日本のように大講堂に何百人もの学生を集めて授業を行うことはなく、一般教養課程もないに等しいカリキュラムですので、いきおい学生たちは、入学後直ちに専門分野の研究に従事することになります。大学での専門授業はカレッジではなく、各Instituteで行われます。ちなみに私の専門のインド学・仏教学の授業はオリエンタル・インスティチュート(Oriental Institute)で行われています。ですからこの分野を専攻する学生たちは、各カレッジから、このインスティチュートにやって来て、勉強するわけです。また理科系の学生は、市北部にあるUniversity Sceience Areaの各分野に応じた研究棟のなかで実験等を行います。

勉強好きな大学生

英国に到着して以来、急に勉強好きになった私の妻は、英会話を習いたいとしきりに言うようになりました。もともとおしゃべり好きの彼女ですから、英国人等と会話が出来ないのが歯がゆく思えてきたのでしょう。毎朝Good Morningとすれ違う人と挨拶をかわすだけでは確かに物足りません。市内には、無数に会話学校がありますが、この学校に入学

するのも考えものです。なぜかというと、まず非常に費用がかかる。英国には無数に英語の教師がいるのですから、わざわざ高い授業料を払って、日本から英会話の勉強に来ているキャピキャピの大学生と勉強するのはナンセンスです。それより隣りの主婦とか、果物屋のおじさんと話すほうがずっと役に立つ、これが私の意見でした。実は、家内がいないあいだずっと一歳半の子供のお守りをさせられるのではないかという恐怖感が私の本音だったのです。

そこで私と妻との主張の妥協案として、女子学生に週に数回家に来て頂き、英語のレッスンを受けることになりました。これだと私は一時間ほど子守りをすれば良いし、私がいなくても妻は子連れ授業を受けることが出来ます。ほどなくして運よく日本語を専攻する女子学生にめぐり会うことが出来ました。彼女は一年前二ケ月ほど日本に滞在した経験があり、さらに今年の九月からは交換留学生として京都大学で学ぶ予定ですので、とても私たちには願ってもない人物です。性格も几帳面でおとなしく、まさに優等性といったタイプです。約束の時間は厳守し、十分ほど時間を延長して妻に英語を教えています。私のようなずぼらな人間にはとても考えられないくらいまじめな大学生です。

彼女が妻の教師となってから一月が過ぎた頃、日本語を学ぶ英国学生と、英国で学ぶ日本学生との交換ガーデン・パーティーに招待されました。あい変わらず日本人は同国人どうし集まり、英国学生とのコミュニケーションは全くなく、まるで水と油のようでしたが、私は彼女が常に側にいてくれたおかげで多くの学生と話す機会がもてました。彼らと話して驚いたのは、勉強が純粋に好きなこと、そして卒業論文のテーマをかなり前から決め、ちゃくちゃく準備していることです。日本の大学生は司法試験あるいは大学院進学といった目的をもつ者を除けば、十中八九勉強よりもアルバイトやレジャーに狂奔しています。就職するのには〇〇大学出身という肩書が必要なのであり、優の数はさして問題になりません。むしろ運動部にいて不屈のスポーツ精神を培ったことのほうを企業は高く評価します。これは英国でも同じで、成績優秀な学生はかえって、「退屈な人間だ」「どうして大学院に進まないか」等の理由で企業に敬遠されます。それにもかかわらず彼らは勉強好きです。どうしてでしょうか。この交換会の後、少しの間この疑問に対する答えを検討した結果、私の独断的解答を次のようにだしてみました。

㈠個別指導の成果、日本のようにマ

スプロ教育でなく個別指導制のため、学生は勉強する意欲がしらずしらずのうちにわいてきます。教師との面談は受身の授業ではなく、今までに何をしたのか、これから何をするのか、という明確な解答が要求されるのです。従って学生は常に準備をしていかなければなりません。しかも自分の興味ある分野を深めることが主目的であるため彼らはさほど倦怠感を抱かないのです。

㈡大学生としての自負、英国の大学進学率は十パーセントにも満たないのが現状です。これは米国や日本のように四、五十パーセントの進学率と比較して断然少なく、彼らには未だ「選ばれた者」という自負心が強く残っています。ただこれ程社会が高度化し複雑化している現状で、英国のような少数に開かれた門戸が良いかといえば、大いに疑問が残ります。

㈢国民性、日本人は物事を余り深くとらえず、知識も表層的にしかも広分野にわたって求めがちですが、英国人は深く専門的に物事を知ろうという傾向にあります。

㈣大学の環境、主都ロンドンから理想的な距離を隔ててあり、都会のもつ様々な刺激から解放されて十分に勉強に打ち込むことが出来ます。オックスフォード大学と肩を並べるケンブリッジ大学もやはりロンドンから列車で一時間半ほどの距離にある人口十万余りの町の中にあります。主都から離れることが、学者にも学生にも落ち着きを与えるのでしょう。しかも学生の大半はカレッジの寄宿寮に住んでいますので、友達同志お互いに啓発されるようです。

以上のような理由をたてて、彼らの勉強好きの解釈をしてみましたが、やはり日本人の私にはなかなか理解しかねます。しかし見習うべき点が数多くあることだけは確かです。

愛知学院大学文学部助教授
善光寺海外留学僧
ロンドン在駐　引田　弘道

ワット・パクナムの一宝から

図書館の件はどの位本が集まるかわかりませんので一応台帳にするＢＯＯＫとラベルだけは用意しておりますが本の部数によって場所を決めて頂こうと思います。なるべく一階の図書部の方に場所をほしいのですが、まだ河北先生(注)にもこの件でお願いしてはおりません。

2、3回伺ったのですがお留守の時ばかりでしたし、まだ状況が整っていないのでもう少し待ってからと思っています。

それに夏の暑さでこの一ケ月半以上汗アレルギーであせもが胸から首までひどくなり汗をためない様に扇風機の風にあたってばかりいましたら、今度はのどをやられ気管がやられ胸の奥からゴホンゴホンとせきが出てとまらなくなってしまいました。薬を頂いてのんでも扇風機をつけないとじわっと汗が出てきてあせもをちくちくと刺激しますので薬をつけてもだめですし、風にあたるとせきの方がひどくなると云う様にどちらをとってもうまくありませんので夏の過ぎるのを待っています。

今年はとくに早くから暑くて日本語のラジオタイランドをきいていましたら、電力の消費量もこの暑さのために例年の10％以上も多いそうです。

この二、三日あけ方に雨や雷がありますのでそろそろ雨季もちかいことでしょう、それ迄無理をしないで暑さにやられない様に注意しています。

図書館が整ったら新聞の記事にしていただき、在留日本人の方等、仏教に関心ある方も利用できるのではないでしょうか。

パクナム寺にもお詣りをかねて出かけてくる方があれば仏縁にもなると思います。

渋井師は今、カンボジアへトウドン(行脚)の旅に出ておられます。

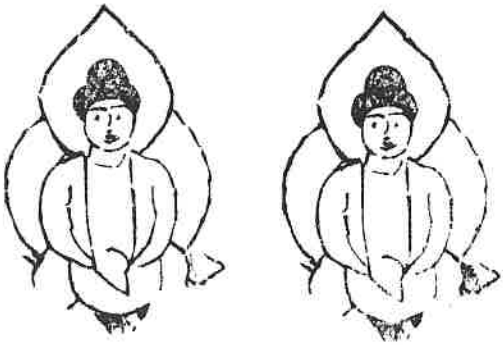
二週間のビザがもらえたそうでベトナム経由で行かれました。タイからは直接便がないそうで、ベトナムから一週間に一便飛行機が出ているそうです。

渋井師の日本語教室の方も数人の参加者があって朝はやくからやっている様です。渋井師は次にベトナムへも行かれるそうでベトナム語の本を手に入れて居られます。ベトナムからのメッチイ（在俗の尼僧）さんが居りましたので紹介してあげました。発音を吹き込んでもらいたいとの事。カンボジアから帰ったらと言う約束になっています。メッチィ・メータはなぜか私と中央郵便局その他の郵便局でばったり出会うのです。タイ語が上手なのでタイ人とばかり思っていましたら、ベトナム人で十九歳のとき、二、三年のつもりでパクナム寺へ勉強に出てきたらそのまま十

五年もいて帰れなくなってしまっているとの事です。南ベトナムのパスポートを持ったまま祖国は南北統一されてしまい、そのまま両親にも会えないそうです。
フエの方で南北の境に近いところは戦争もひどかった事と思います。然し来年はどうしても帰国すると言っていました。(一度帰ったら再び出国はむずかしいとか) パクナム寺にもいろいろな人がいます。
今年の春のお彼岸に日本人会のバスに便乗してカンチャナブリに参りました。泰緬鉄道建設のために亡くなった人々のため第二次大戦中に日本軍によって建てられた慰霊碑での法要に参加しました。ワット・リャップの渡辺師のゲストとして行かせて頂き、クワイ河の上の鉄橋も渡ってきました。写真の焼増をたのみましたら、フィルムを裏からやいたらしく少しおかしくなりましたが一枚同封いたします。
その折とった写真の中に兵隊さんがいっぱい居る様なとても不思議なのがありました。私はあまりその様な事は信じないのですが、戦争中の色々のむごさを知っている最後の世代です。
ビルマ方面で亡くなったたくさんの方々、そしていまだ十分に遺骨も収集されず、供養もされない方々があることは事実です。
自室の仏壇に写真を供えてお水をあげ数日朝夕お経をあげ、亡者回向をしておきました。
小谷氏も見せてほしいとおっしゃったので、ひきのばしてお届けしておきました。

タイ国派遣留学僧
バンコク在住　**山本　浄月**

(注)
河北国雄師　父は日本人、母はタイ人、タイ僧名プラパーワナ・コーソン・テーラ、日本語が堪能な高僧でワット・パクナム副住職



生かされて生きる

大本山総持寺内　岩波弘道（方行）

米国ニューヨーク州のマンハッタンより、車で北上すること約二時間。そこには道真寺というお寺があります。もっとも、道真寺と言っただけでは現地の人々には、ここがお寺であるとはわかりません。そこでZEN MOUNTAIN MONASTERYと、いう呼び方も合わせて用いられています。私は縁あって、二年前の八月までの四ケ月間、この道真寺に滞在することができました。

道真寺には、二十各種のメンバーが住みこんでいましたが、他にも多くのメンバーがおります。彼らの指導に当たるのは、ジョン＝大道＝ローリー師。もちろんアメリカ人です。正式に僧侶になっているのは、居住者のうちでは二人。あとは、授戒と言って仏教徒になる式をすませた人と、そうでない人が半々ずつでした。（道真寺では、得度は授戒の次の段階と位置づけられています。つまり授戒を受けない者は得度を受けられない＝僧侶になれない、ということなのです。）しかし、生活のスケジュールは皆一緒です。朝は四時半に起きて五時から坐禅とお勤めが六時四十五分まで。七時朝食。八時十五分作務（労働の時間）、他にも午後の坐禅と作務。勉強の時間、運動の時間等があります。そして九時半に消灯します。

私はメンバーの中で特にジェジョと働くことが多くありました。彼はその名前から想像すると、スペイン語の国の血筋であると思われます。背は高くありませんがしまった体をしており、とても人なつっこいところがあります。ところでジェジョは、道真寺に来る前は刑務所にいたのです。勿論、大道師を初め他のメンバーもそのことを知っています。そして、全く気にしている様子はありません。大道師は、定期的に刑務所へ出向いて坐禅の指導をしているのですが、ジェジョはそこで初めて坐禅に出会ったようです。

しかし、私には彼が悪い人間だとは、とても思えません。実際彼は、初めての土地で慣れないことばかりの私に、いろいろと世話を焼いてくれたのです。ですから、一時的とは

言え、彼が道を誤ったのには何らかの事情があったのに違いありません。

次のようなことがありました。ジェジョには、母親とニューヨーク市で暮らしている娘さんがいます。彼女の名はルース。十四歳だそうです。ある日ルースは、夏休みを利用して一週間程父親の所へ遊びに来ました。ジェジョがルースを大道師に紹介した時です。彼女は自分の父親に向かってこう尋ねました。

「パパ。この人、パパの御主人様？」

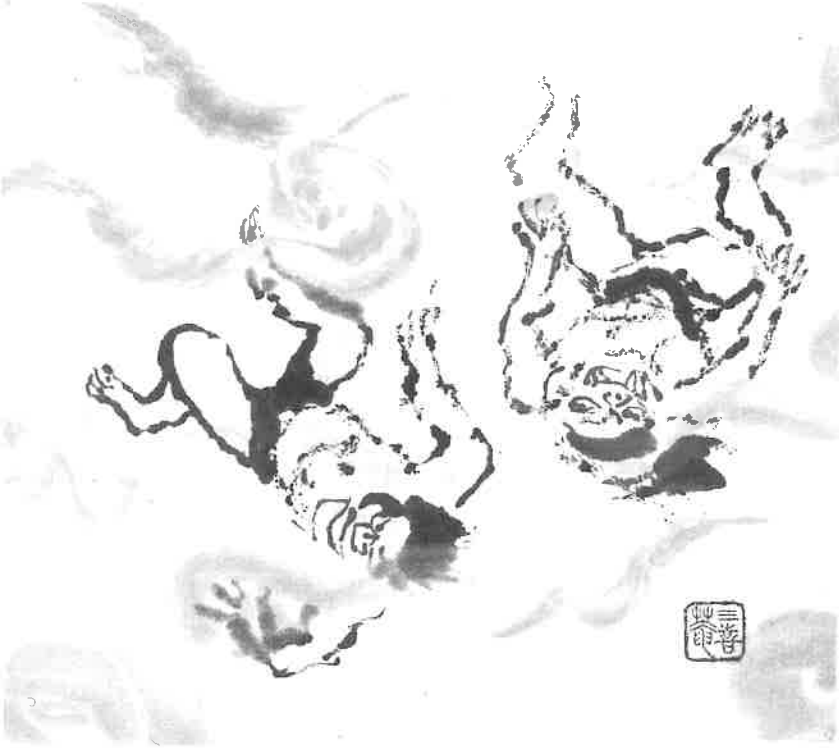
「違うよ。パパの先生（師匠）だよ。」と、ジェジョが答えます。この時は何気なく聞き流してしまいましたが、これは中学生位の女の子のする質問でしょうか。初めて会った人を主人かと問う娘と、主人ではなく先生であると答える父親。私はこうしたやり取りを通して、彼らが生きている社会の問題点を垣間見た気がしました。

人の不幸の原因をすべて環境に帰するのは、少々乱暴な考え方です。しかし、何らかの影響があったとは言えるでしょう。つまり今まではジェジョに対し、彼が持つ力を発揮できるよう助言してくれる人はいなかったのだ、と私は思いました。

御開山様瑩山禅師、二十七歳のある日のことです。お師匠様である徹通禅師は、お弟子の皆に「平常心是道」の意義をお訊ねになりました。瑩山禅師は「茶に逢うては茶を喫し、飯に逢うては飯を喫す」この言葉の心はお茶にあったらお茶を飲み、御飯にあったら御飯を食べるということですと、お答えになられました。

私は、特にジェジョのことを考える時、このお言葉を「その場その場で一所懸命やる、全力を尽くす」という風に頂戴したいのです。世の中、なかなか思い通りには参りません。私達の回りには、苦しいことや悲しいことがたくさんあります。ですが私達は、生まれてきて今生きています。そして、生きている以上、よりよく生きたいと思う。これは私達の切なる願いであります。

私達は皆、仏の種子（たね）を持っている訳ですが、良い種があったら大きく育てなくてはいけません。そのためには、今この瞬間を大事にするという、今、今の連続である生き方であって欲しいのです。何かを大切にして生かすということは、ただ無駄にしないというだけではなく、人でも物でもその持てる力を引き出し発揮させるということです。

今を大切に生きる時、私自身が生かされます。生かされた命を生きる、それこそが、よりよく生きることなのです。

（平成元年度春季布教弁論大会総裁賞受賞）